「協同」が生まれる授業を目指した小学校における省察的実践の過程

三條　奏子（平成29年度教育実践コース修了）

第１章　「協同」が生まれる授業を目指した経緯（１年次前期の学び）

実習校での授業観察を通して、立場の違う子ども同士で協力しながら問題解決へと向かわせることや、そのために教師が話し合いを方向付けたり、子どものトラブルやつまずきを成長の糧にさせたりすることが大切であると学んだ。このことは、生活場面の指導においても、授業場面の指導においても共通するだろう。実習において、学校生活の大部分を占める授業の中で、子どもの認知的側面はもちろん、態度的側面を育てる意識をもつ必要があると実感した。そして、このような「学習指導と生徒指導の一体化」を実現する授業のためには、子どもが他者とかかわりながら学ぶことが重要であると考えた。授業の中で他者とかかわり、互いに協力しながら課題を解決する経験を重ねることで、子どもの認知的側面だけでなく態度的側面も育てられることが期待される。

大学院の講義『授業における学習研究』において、会話の中で新たに考えが形成されたり、考えが変容したりする会話として「探索的な会話」を学んだ。探索的な会話のある学習では、友達の意見を自分の考えに取り入れたり、友達とのかかわりによって自分の学びを深めたりする姿が見られる。また、子どもの協同を生み出すためには子どもの「分からなさ」を尊重することが大切であり、探索的な会話の特徴として「リヴォイシング（再発話）」があると学んだ。リヴォイシングとは、相手の発言を自分の発言の中に取り入れたり、相手の発言を自分の発言に参照したりする発話である。

これらの学びを踏まえ、１年次後期からの授業実践において、「『協同』の生まれる授業」を目指すことにした。具体的には、①子ども同士の双方向のかかわり（探索的な会話）を通して学びが展開される授業，②子どもの「分からなさ」を引き出し，それを学級全体で共有しながら学ぶ授業，③他者とかかわることで学びが得られたことを実感し，その学びを振り返ることができる授業、といった視点から授業を構想・実践した。

第２章　授業運営面の工夫から協同が生まれる授業を目指す（１年次後期の学び）

本期間の実習の目的は、「協同」が生まれる授業を実現するため、教師がどのような働きかけをするべきかについて検討することに置かれた。

授業実践では、子どもが友達と考えを交流したり、話し合いを通して思考を深めたりすることで、新たな価値や経験を得られることを目指した。このような学習を積み重ねることで「友達の考えのよさ」や「他者と共に学ぶよさ」に気づき、「友達の意見を聞きたい」「みんなで学習をしたい」という、さらなる協同への意欲が生まれてくると考えた。そこで、授業において育てたい子どもの力を「肯定的な自己理解」と「肯定的な他者理解」と捉えた。協同に対する肯定的な経験を重ねることで、新たな課題に直面した時や授業外の生活場面でも、授業で身に付けた経験やスキルを用いるようになると考えた。

そして、「協同」を「子ども同士がかかわり合って学ぶことで、互いの考えのよさやかかわりながら学ぶことのよさを実感できること」と捉え直した。本実践では、子どもの「肯定的な自己理解」・「肯定的な他者理解」の伸長を目指しながらも、まずはそれに向かうための「協同」を生む教師の働きかけについて検討した。

【授業実践Ⅰ：「名前を見てちょうだい」】

本実践の目的：自身の授業力に関する実態を把握し、授業分析の視点を得ること。

授業の概要：２年・国語の単元「名前を見てちょうだい」の授業を行った。授業のねらいは、「音読の工夫を考えることで、登場人物の様子や気持ちを想像することができる。」であった。

成果と課題：子ども同士の「協同」という視点で授

業を省察すると、全体を通して子どもの言葉を拾い、それを板書に反映させながら授業を進めることができた。授業者の発問についてペアで相談させたり、全体で考えを交流させたりするなどのかかわる活動を意識して取り入れた。しかし、かかわる活動をしていても、一人の意見を全体で共有したり、子ども同士の意見がつながったりする学びにはなっていない場面もあった。その要因を振り返ると、かかわる活動を促す授業者の発問や指示が曖昧であったことが考えられた。このことから、かかわる活動を取り入れるだけでは必ずしも「協同」が生まれる訳ではないことを実感した。

授業実践を終え、自身の課題を把握した上で実習校の授業を観察すると、これまでは意識できなかった教師の「協同」を促す働きかけに気づけた。例えば、教師が子ども一人一人の意見を大切に扱うことや、一人の子どもの発言に周りの子どもがつなげて発言するよう促すことが重要であると学んだ。

【授業実践Ⅱ：「およげないりすさん」】

本実践の目的：自身と学級担任の授業を分析し、同一の学級における授業を比較することで「協同」を促す教師の働きかけや子どもの様子を検討すること。

授業の概要 2年・道徳の資料「およげないりすさん」の授業を行った。仲間はずれをつくらずに遊ぶため、悲しむ友達に気づくこと、みんなが楽しめるよう協力することが大切であると気づかせる授業である。

成果と課題：「協同」という視点で授業を省察すると、ペアでの相談は活発であった。その要因として、授業者の指示が何を考えるべきか明確であったこと、課題に答えられそうな呟きが増えた時にペアの相談に入ったことが考えられた。一方で、授業者と子どもの1対1の対話になってしまったやりとりが随所にあった。改善案として、発表者だけでなく周囲の子どもへ問い返すことが考えられた。実際に、子どもの言葉を拾って問い返すことで、それを聞いた周りの子どもにも考えが広がる場面も見られた。

学級担任による授業を分析したことからも、教師が子どもの発言を拾って全体に問い返すことで、子どもが友達の意見を取り入れながら発言していることが示唆された。教師が一人の子どもの発言に共感させたり、子ども同士の発言を関連づけたりすることで、「協同」が生まれるのではないかと考えた。

【授業実践Ⅲ：「はこの形」】

本実践の目的：全体交流での「協同」を促す教師の働きかけや子どもの様子を検討すること。

授業の概要：2年・算数の単元「はこの形」の授業を行った。箱を作る活動を通して箱の面について考えさせる授業である。一人の子どもの考えが周囲の子どもに共有される授業を目指した。

手立て：①子どもの発言を用いて全体に問い返すことで、子ども同士の発言や考えが関連づけられるようにする。②「困っていること」を尋ねることで、互いの考えを想像できるようにする。

成果と課題：これまでの実践に比べ、考えの共有を促したい場面で子どもの発言をリヴォイシングしたり、問い返したりする働きかけができた。それにより、一人の子どもの発言に他の子どもが意見を付け足して発言する姿が見られた。また、「困っていること」を共有することが、互いに考えを伝え合い、友達の考えを想像しながら説明するきっかけとなった。談話分析からも、教師が子どもの発言を拾うことで、子ども同士で考えを共有し、友達の考えに関連させながら自分の考えを話す子どもの姿が見られた。

これまでの授業実践とその分析から、「協同」が生まれる授業の実現のためには、①「共有化」の手立て、②「肯定的な対応」の手立てが重要であると考えた。「共有化」の手立てには、教師がリヴォイシング等により子どもの発言を価値付けたり、子ども同士の発言をつなげたりすること、問い返すことなどが含まれる。「肯定的な対応」の手立てには、子どもの考えや発言を肯定的に受け入れること、「友達の考えのよさ」や「かかわることのよさ」に気づけるよう促すことが含まれる。教師が子どもを肯定的に認めることで、子どもは自分のよさや友達のよさに気づいたり、教師の姿をモデルとして進んで友達のよさに気づいたりできるのではないかと考えた。

第3章　教材研究面の工夫から協同が生まれる授業を目指す（2年次前期の学び）

本期間の実習の目的は、「協同」が生まれる授業を実現する教師の働きかけについて、とりわけ「教材研究」の観点から検討することに置かれた。

新しい実習校で日々の授業を観察し、教師の働きかけや子どもの様子を検討する中で、学級の子どもの実態を把握したり、授業実践の方針を定めたりした。授業観察を経て、「協同」が生まれる授業を実現するための視点として「ペア活動・グループ活動のねらいの明確にする」「問題に対する共通の見通しを持たせる」ということが重要であると気付いた。

【授業実践Ⅳ：「漢字の読み方に気を付けよう」】

本実践の目的：昨年度の学びを生かして授業を行い、自身の授業力や子どもの実態を把握し、今後の授業づくりにおける視点の獲得をすること。

授業の概要 4年・国語の単元「漢字の読み方に気を付けよう」の授業を行った。送り仮名の働きについて考える授業である。

成果と課題：〈①前年度の学びから生かせたこと〉「共有化」や「肯定的な対応」を意識して取り入れた。子どもの発言に対して「それってどういうこと？」「みんなも分かる？」と問い返すことで、発表者以外の子どもが反応したり、友達の意見につないで発言したりする姿が見られた。一人の発言を全体に返すことが、双方向的な対話を生み出す手立てになり得ると実感した。〈②問題への見通しや期待を持たせること〉問題への見通しや期待により、子どもは進んで考え始めると分かった。〈③問題意識やかかわりの必要感を生み出すこと〉かかわる場面を与えるだけでは、子どもは主体的に動かないと改めて実感した。子どもの中に問題意識やかかわる必要感を生み出すことで、その後のペア・グループ活動でのかかわり方や態度が大きく変わると考えた。〈④場面によるかかわりの質の違い〉授業の随所でペアでの相談や説明をするよう指示をしたが、場面によって子ども同士のかかわりに質の違いがあると感じた。

授業実践Ⅳでは、「共有化」によって子ども同士の対話を促したり、一人の考えを全体に共有したりすることや、「肯定的な対応」によって発言しやすい・安心して学べる環境づくりを意識することができた。これらの手立てはどの教科・教材でも活用できる「授業運営」の側面が強い手立てである。一方で、授業観察や授業実践Ⅳを経て、「教材研究」の側面から授業改善を行うことでも「協同」が生まれる授業の実現に向かうと考えたと共に、そこに課題があると感じた。「教材研究」を工夫し、教科の本質に迫る問いの生成や活動の設定に取り組むことを本期間の課題の一つとした。

【授業実践Ⅴ：「いろいろな四角形」】

本実践の目的：「教材研究」の視点から授業を実践・分析し、教師の働きかけについて検討すること。

授業の概要：4年・算数の単元「いろいろな四角形」の授業を行った。四角形の構成要素を調べることで、ひし形の特徴を理解する授業である。「自分の考えや発言が他者に認められたり学びに生かされたりすること」や「他者の考えや発言のよさに気づき、それを生かしてねらいの達成に近づくこと」を目指した。

手立て：①図形の構成要素に着目し、図形を比較・分類させる（単元を通して養う力の設定）。②子ども同士がかかわる場面を設定する。子どもがかかわる中で、構成要素に着目して図形を比較・分類し、図形の特徴について説明し合える活動を設定した。

成果と課題：単元を通して「構成要素へ着目させること」を伝えたことで、「角の大きさ」「辺の長さ」といった学習課題を考えるための見通しを持たせることができた。学習課題の提示後、解決の見通しを立てるため「何が分かると学習課題が分かりそう？」と問うと、「四角形の種類」と発言する子どもがいた。そこで「種類ってどこで調べる？」と問い返すと、その子は少し考えた後「辺の長さ」と答えた。このような問い返しにより、子どもの考えを否定せずに本時の学びに繋がる要素として位置付けることができた。また、子どもが互いの考えを聞き合い、一つの考えにまとめていくことをねらいとし、グループ活動を設定した。どのグループも本時の学習内容に迫る考えにまとめていた一方で、グループでの交流にかかわれていない子どもの姿も見られた。そのような子どもに対してどのような支援をするべきか課題を感じた。全体交流では、各グループの考えについて共通点などの気づきを交流する中で、授業の「まとめ」を考える場を設定した。しかし、子どもの発言は少なく、授業者が子どもの発言を使いながら説明する形で「まとめ」を整理した。その要因として、全体交流以前にほとんどの子どもが学習課題を達成しており、全体交流での目的意識が子どもになかったことが考えられる。授業の最後まで子どもたちが学習意欲を持ち続けるため、授業全体を通して目的意識が保たれるような学習課題や、各活動のねらいの明確化が必要であると考えた。

これまでの授業実践とその分析から、以下のことを考えた。〈①授業の中で子どもを「つなぐ」・「認める」という視点の獲得〉「共有化」や「肯定的な対応」について再考すると、これらは、再発話や問い返しによって子ども同士の対話を促すこと（つなぐ）、子どもの考えや意見を肯定的に認めること（認める）であると捉えられた。そして、教師が子どもを「つなぐ」・「認める」ことで協同が生まれ、次第に子ども自身が互いを認め合い、つながろうとしながら学んでいく、つまり、「肯定的な自己理解」や「肯定的

な他者理解」が育っていくのではないかと考えた。〈②教材研究の工夫から子どもを「つなぐ」・「認める」〉かかわる必然性のある学習課題や全員の子どもが意欲や見通しを共有できる学習課題を用意することでも、子ども同士を「つなぐ」ことになるのではないかと考えた。また、子どもの多様な発言を授業で生かし、それを本時の学びにつなげることでも、子どもを「認める」ことになるのではないかと考えた。授業の中で子ども一人一人の価値を認め、子ども同士をつなぐためには、「教材研究」と「授業運営」の両要素が大切であると学んだ。授業実践Ⅴにおいて、子どもの発言を拾い、本時の学びに生かすことができた場面があった。それは単元を通して養いたい「見方・考え方」を設定することで、それに関する発言を拾ったり、問い返しながらキーワードを引き出したりすることができたからだ。「授業運営」における「つなぐ」・「認める」ための判断の拠り所としても、教材研究が生かされると学んだ。〈③子どもの反応、つまずきを想定する重要性〉授業に自分の考えが反映されたり、友達とかかわる中で自分の考えが認められたりすることが、協同のよさを実感することに繋がる。そこで、授業や話し合いの活動に参加できない子どもに対する支援について課題を感じた。授業の構想の際、起こりうる子どものつまずきを想定し、対応を考えておくことが必要である。「どの子にも起こるつまずき」に対しては教材研究を深めることで、「特定の子に起きるつまずき」に対しては子どもの実態を細やかに観察することで、教材や実態に応じた対応を考えられるのではないか。〈④「協同」を生むための教材研究面の工夫〉教材研究の視点から工夫できるのは、「ねらいを明確に把握することができる」「子どもの反応を想定できる」ということであると学んだ。

第４章　授業において子どもを「つなぐ」・「認める」ために（２年次後期の学び）

これまでの実習を経て、新たに以下の２つの課題をもった。①教材研究や子どもの実態把握によって、授業において「つなぐ」・「認める」ことができる場面や視点を想定すること。②授業運営面の手立てを意識し、あらかじめ想定した場面や視点で子どもを「つなぐ」・「認める」授業を実践すること、である。

【授業実践Ⅵ：「計算のしかたを考えよう」】

実践の目的：新たな課題の達成を目指して授業を実践し、それを分析・検討すること。

授業の概要：４年・算数の単元「計算のしかたを考えよう」の授業を行った。1.2×3 の計算の仕方について様々な方法で考える授業である。「自分の考えを相手が分かるように伝えたり、相手の考えを分かろうとして聞いたりする」「自分や相手の考えのよさや互いの共通点に気づく」という姿を、目指す子どもの「協同」の姿とした。

手立て：①小数×整数の意味理解を促す問題提示の工夫。②自分の考えをもたせるためのスモールステップ。③目的意識を明確にした意見交流の場の設定。④子ども同士の「協同」を促す手立ての工夫。

成果と課題：談話分析や振り返りの記述における考察から、構想した４つの手立ては概ね有効に働いたと示唆されたが、それぞれ課題も残った。「自分の考えを相手が分かるように伝えたり、相手の考えを分かろうとして聞いたりする」ことに関しては、特定の子どもだけでなくどの子も授業内で自分の考えを伝えられる機会を設けることや、聞き手になる子どもたちに発表を聞きたいという意欲を持たせることが必要だと考えた。また、「自分や相手の考えのよさや互いの共通点に気づく」ことに関しては、子ども同士の交流における説明の質を高めていく中で、学習内容につながる互いの考えのよさや共通点に気づかせたいと考えた。

これまでの授業観察や授業実践を通して、子どもたちが「協同」する姿を具体的に見取ることや、「協同」が生まれる授業の実現に必要な手立てを模索することができた。このような実践と省察の往還を今後の教師生活においても絶えず行っていきたい。これまでの数回の授業実践では、子どもの成長や変容までを見取ることはできなかったが、今後、学級担任として「協同」が生まれる授業の実践を継続しながら、子どもの成長や変容を考察していく。

第５章　２年間を振り返って

以上、「協同」が生まれる授業を目指した２年間の実践を述べてきた。改めてこの２年間を振り返ると、これまでの実践を通して「子どもの姿を具体的に想定し、場面に応じた手立てを構想する力」が身についたと実感している。子どもを継続的に見取っていく過程で、授業の実践と考察を繰り返すことができたこと、自身の授業実践と学級担任の授業実践を比較しながら授業観察することができたことにより、この力が身についたのではないかと省察される。